

小論文

注意事項

1. 解答開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子は、問題用紙8枚、解答用紙2枚（「解答用紙（その1）」・「解答用紙（その2）」）です。
3. 落丁、乱丁または不鮮明なところがあれば、すぐに申し出てください。
4. すべての解答用紙の指定の受験番号欄に受験番号を記入してください。
5. 解答用紙の※欄にはなにも記載しないでください。
6. 解答はすべて解答用紙に横書きで記入してください。
7. 【問題1】の解答は「解答用紙（その1）」に、
【問題2】の解答は「解答用紙（その2）」にそれぞれ記入してください。
8. 問題用紙に解答しても採点されません。
9. 問題用紙の余白は、下書きに利用しても構いません。
10. 解答を記入した解答用紙は、裏返して机の上に置いてください。
11. 試験が終了するまでは退室できません。
12. 試験中の発病または用便などやむを得ない場合は、手を挙げて監督者に申し出てください。
13. 問題用紙は持ち帰ってはいけません。

小論文

問題用紙

【問題1】次の文章を読み、あとの設問に答えなさい。

経済学者や経済評論家そして経済系のジャーナリズムもいうまでもなく「成長主義」に^{まみ}れている。ある経済政策を批判する場合にも、その政策では成長できない、というのが通例だろう。もっとも、最近、事情は少し複雑になり、経済格差の拡大が今日の経済問題の最大テーマのひとつになってきた。そこで、成長よりも所得再分配を優先すべきと説く経済学者もでてくる。しかし、これは経済成長そのものへの異議というよりも、その修正というべきだろう。成長（効率性）と配分（公正性）の間のバランスという問題は別に新しいテーマではなく、経済学にずっとつきまどってきた課題なのである。

それに対して、私は、「脱・成長主義」というものを論じてみたい。それは、第一に、今日、われわれはもはや経済成長を生み出せる状況ではなくなりつつある、と考えるからであり、第二に、それにもかかわらず経済成長を第一義的な価値とする「成長主義」は、われわれにとって、もはや幸福を約束するものではないと考えるからである。

この場合、より重要なのは後者の方である。「経済成長」という事実よりも、「成長主義」という価値もしくは考え方の方である。余計な誤解を避けておきたいので、あらかじめ述べておくが、私は、何が何でも「経済成長をやめろ」などというつもりはない。別に経済成長を目の敵にしているわけではない。

確かに、私は、今日の世界経済、とりわけ日本経済は、少なくとも中長期的にみて、もはやそこそこの成長率（たとえば数年にわたり平均して2%程度の成長）さえ達成できる状態ではない、と考えている。せいぜい1%もいけばよいだろうと思う。人口減少社会なら0%でも一人当たりのGDPは成長する。しかし、私は別に計量的に推測したわけでもなく、特別な根拠があるわけでもない。だからそのことを争うつもりはない。

問題はむしろ、さして根拠もない推測や予測に基づいて日本経済はもっと成長できるのだ、3%成長を目指すべきだ、などという無責任な言説があまりに多すぎる点にこそある。そうした成長待望論者に限って、脱成長という悲観論などケシカラン、という。その気になればできる、あらかじめあきらめるのは敗北主義だ、というわけだ。

私が問題としたいのは、現にそこそこの成長が可能なのか、それともほぼゼロの低成長路線に入るか、ということではなく、この成長至上主義の思考そのものなのである。日本の成長率が何%になった、さあ大変だ、あるいは、成長率があがった、日本は復活した、とばかりに一喜一憂する種類の成長主義とは訣別^{けつべつ}したいと思う。

それは、ただ私の個人的な願望や嗜好というだけではない。われわれは、統計的数値として示される経済成長率に何か大きな意味があると考え、その数値をもち上げなければ気が済まなくなっている。そして、あたかも血圧計の測定結果が体の健康を示すかのように、成長率の数値の上下だけが、われわれの幸せの尺度であるのかのように思ってしまった。血圧とは逆に、この数値が年々あがっていかなければ、何か生活が豊かになり、幸せになれるかのようにたちまち不安になってしまう。

だけれども少し考えてみよう。自動車を一台買うことで幸せを感じることもあれば、一人の信頼できる友人を作ってこの人物とゆったり話をするに幸せを感じることもある。ある程度の生活レベルが達成されると、たいていの人は、後者の方により魅力を感じるだろう。だがそれではGDPは増えない。自動車を購入すればささやかではあるが経済成長には貢献する。成長と幸福感が一致しないのはあたりまえなのである。

にもかかわらず、いつのまにか、可能な限り大きな成長を達成することこそが望ましい、という成長信仰からわれわれは抜け出せなくなった。そしてそのことは、一人の友人を見つけるよりも一台の自動車を買う方をよしとする社会へとわれわれを誘導してゆく。大事なことは、これはひとつの価値観だということなのである。個人の嗜好や選択の話ではないのだ。経済成長をめざす社会とは、一人の友人とゆっくりとおしゃべりを楽しむ「無為な」時間よりも、せつせと働いて収入のレベルを上げ、高級な自動車を購入することにより高い価値をおく社会なのである。こうした社会では、「無為」であることは不道徳になる。有用性と効率性が支配的な価値になる。こうしてわれわれは、活動は常に有用性をもたなければならず、非効率であることは悪であるかのような社会へと押し込められてゆくだろう。

しかし、いったいそこにどのような合理的な理由があるというのだろうか。われわれは何のために経済成長を求め続けるのか、その先に何があるのだろうか。こう問うても確かで納得のゆく答えはどこからもでてこないであろう。それなのに、われわれは見事なまでに成長幻想もしくは成長主義に囚われている。きわめて長い人類の歴史のなかで、物的な意味でこれほど豊かになり、そして、これほど高度に個人的な自由を享受している時代はない。にもかかわらず、今日われわれは、いっそうの豊かさや自由とを求めるあげくに成長主義に捕捉され、たいへんに窮屈な経済の論理の中に収監されている。

これは、近代社会の合理的な選択の結果などというのではなく、理性的な判断の帰結などというものでも決していない。成長主義とはひとつの明確なイデオロギーというより、輪郭のはっきりしない共有された感情であり気分といった方がよい。それは、輪郭はあいまいであるが、その核にはきわめて強固な情緒をもった気分なのだ。昨日よりは今日の方がよくなる、今日より明日はもっとよくなる。いや、よくなってはならない、という規範的な願望を含んだ気分である。

近代社会にはいつて、われわれは時間というものをそういう風に見るようになった。未だ来たらず、という未来への不安を、希望というあいまいな情緒を信じることで克服しようとしたのである。明日が今日と同一状態ではまだ不安なのだ。それほど、近代に生きるわれわ

れは未来を確かなものとして信じるができなくなってしまった。だからこそ、未来は、今日よりもよくなければならない、という強迫観念に囚われてしまうのであろう。しかもそこに「進歩」という言葉を当てはめるという念の入れようである。モノが増えるという物象的形態はよりよい社会の物証的事実となった。かくて経済成長とは社会進歩のもっともわかりやすい指標におさまった。富が少ないよりも多い方がよいと無条件に信じることであれば、経済成長が「進歩」であることは論をまたない。こういう了解ができたのである。

繰り返すが、ここには何の合理的理由も確実な根拠もない。それはほんの少し考えてみればわかることだ。なぜなら、富を生み出すためには、それなりの犠牲を払わなければならない。無償で贈与される富は太陽の熱と大地の恵みぐらいである。富は空から降ってくるものではない。とすれば、この犠牲と富を比較しなければ、実際には富の増大が進歩を意味するかどうかはわからないであろう。ところが、富の方はともかく、犠牲の方は、簡単には計測できないし、そもそも何を犠牲と考えるのか、どこまでを犠牲と考えるのか、あらかじめ決まった基準はどこにもない。ということは、富の増大をそのまま「進歩」とみなす理由はどこにもないということになる。成長主義とはただの情緒、気分といわざるをえないのである。

この点で、フランスの思想家であるジャン＝ピエール・デュピュイが面白い話を述べている。アメリカのイエール大学の法学講義では、定期的に、次のような例が議論されているそうである。ある国の大統領のもとへある者がやってきて、次のような取引をもちだした。「貴国の経済は調子が悪いですな。私が立て直して見せましょう。そのために最新技術をお譲りしましょう。するとGDPはいっきに2倍になりますぞ。ただその代わりに、貴国の人口から毎年2万人の命をもらいたいのですがね」

これを聞いた大統領はうろたえ、申し出を拒否した。拒否するのが当然であろう。彼が拒否した最新技術の発明とは、自動車のことである……。

私が「経済成長主義」に強い疑問を感じるのは、まさに、これと同様のことが「成長主義」のもとでは生じうると考えるからだ。いや、「生じうる」などという控えめな言い方は、かえって事実を欺くことになりかねない。日常的に生じている、というべきだろう。先の、一人の友人と一台の自動車を考えてもよい。高級車を一台手に入れるためにあくせく働けば、一人の友人と過ごす無為な時間は確保できないだろう。それは高級車を手に入れるための犠牲であるが、この犠牲の方はまったく目にはみえず計測もされない。確かに自動車のたえざる発明・改善によってGDPは増加してゆく。しかし自動車事故による人口の減少はカウントされないし、まして、環境の悪化やわれわれの生活のあわただしさからくるストレスなどまったくカウントされない。それで果たして「進歩」といえるのか。われわれの幸福につながったなどといえるのだろうか。

(出典：佐伯啓思著『経済成長主義への^{1つ2つ}訣別』新潮選書、2017、一部改変)

設問１ 本文中の「自動車」の二つの例と同様に、経済成長と人々の幸福が一致しない例を自分で考えて 100 字以内でひとつ書いてください。

設問２ 本文で述べられている著者の考え方について、300 字以内であなたの意見を書いてください。

小論文

問題用紙

【問題2】次の文章を読み、あとの設問に答えなさい。

一般に自然科学に分類される学問では、研究の対象は「こころ」を持たない。もちろん、精神医学、人類学、動物行動学、霊長類研究などの領域では、対象は「こころ」を持ち、「こころ」によって観察者（研究者）と観察される対象との「相互作用」が生まれる。しかし、落下する物体やウィルスなど伝統的な自然科学が対象とする事物は、観察されているからといって、自分の行動や形態を変える、あるいは将来の予想を自ら修正することはない。もちろん、こうした区別が常に明確にできるわけでもない。例えば自然科学でも、量子力学では観察者と対象（電子などの量子）が不可分に結びついていると考えるそう。観察するときに観察対象に光などの量子を当てると、観察対象の量子に変化が発生すると聞く。ただし、この場合でも、対象となった主体（agents）なり事物（量子）は、「こころ」を確実に読み取れない「他者」であり、不確かな「未来」を意識して自己の行動を決めているとは考えにくい。

しかし一定以上の知能を持つ動物の場合、観察されていることを知った場合とそうでない場合では行動が異なってくることがある。それだけではない。倫理学や文学、歴史学あるいは社会学、経済学、政治学などの分野では、人間の心の不確かな動き、他者との相互関係、そして「未来」や「これから」へ向けられる（forward-looking）心理や考えが問題となる。人間は現在をどう捉え、未来に向かってどのように行動するのかが探究の主要なテーマの一つになるのだ。だがこの「未来」に向けた人間の行動をどのように学問的な枠組みの中に位置づけるかは容易ではない。

そもそも未来という概念も曖昧である。確実なのは、古代の賢者が言ったように、過去についての現在、現在についての現在、未来についての現在だけである。あるのは、過去についての現在である「記憶」であり、現在についての現在である「直観」、未来についての現在としての「期待」だけだ。

もう一つ、人間社会の考察を難しくしている要因は、人間と、その人間が属する集団（社会）との錯綜した関係である。人間は、集団の一員として、ほかのメンバーの考えや行動によって自分の行動を決める場合が少なくない。1対1のケースでは、相手の考えや行動で自分の行動が決まることがある。多くの人からなる集団の場合も、「他者」の考えや行動によって自らの行動を決めるケースは珍しくない。「人間は社会的動物である」（アリストテレス）と言われるのは、まさに、人間はひとりで孤立してこの世に存在するわけではないという単

純かつ冷徹な事実を指している。ひとりで存在するとすれば、倫理も道徳も、正義・不正も、知性も愛情も必要とはされないだろう。この問題は、社会研究の古典的名著、『ロビンソン・クルーソー』でダニエル・デフォー（1660?～1731）が鋭い考察を加えている。「人間は社会的存在であること」、そして「未来が不確かであること」、この「知識の不完全性」と「社会的存在」は互いに結びついているのだ。人間の知識が不完全であるからこそ社会性を持たざるをえないのであり、法も道徳もこの不確実性にその発生の源があると考えられる。

この点について、法学者の H. L. A. ハート（1907～1992）の考察は傾聴すべきだ。ハートの立場を要約すると次のようになるだろう。われわれが、いかなる曖昧さもなく、事前に、一般的なルールで人間の行為を規制（regulate）しようとするれば、必ず（相互に関連する）二つの困難に遭遇する。一つは、われわれが相対的に無知だという事実、もう一つはわれわれの目的が相対的に不確定であることだ。われわれが生きる世界の特性や事象が、もし有限で数え上げることができる（countable）とすれば、すべての可能性を事前に列挙して、それに対する施策やルールを作っておき、それを機械的に当てはめれば事は足る。しかし現実には、これら二つの困難を取り除くことはできない（ハート『法の概念』第七章）。さらに、自分の行動が自分以外の人間の行動に依存する場合があること、そして自分が持つ情報が完全でないからこそ、われわれは意識の程度に差はあれ、未来の予想をしながら行動するのである。はっきり意識されていなくても、われわれは推理し予想し、すべての考え、言葉、行動を選択している。「未来」は人間にとって常に不確実であり、「他者」の心を正確に読み取ることはできないのだ。ここに社会研究を困難にする根本原因が存在する。

（中略）

人間の未来に向けた選択・行動について、経済学は問題を厳しく限定しつつも、いくつかの簡明な理論を展開してきた。経済学の場合、概念が数量化されるものが多い。将来の価格がどうなるか、次期の売り上げはどの程度か、あるいは所得は増えるのか、消費税率が上がれば消費はどの程度低下するのかなど、極めて具体的な「数値予測」の形をとる。政治学や国際関係論で、戦争は起こるのか、外交交渉はうまく妥結するのか、報復的な関税措置は採られるのか、などの予想は、考慮すべき要因が多だけでなく、数量化してその予想の当否を数字で判断できないものがほとんどである。ましてや、来春のファッションはどのような色彩やデザインなのかという予想に至っては、何を手がかりに予想すべきかについて一致した見解は存在しない。

経済的な予測は、企業や家計の現在の選択に実質的な（決定的な）影響を与える。経済行動の主体（agents）は、基本的にすべて将来を見据えて物事を決めているからだ。主体が持つ、前に向けた（forward-looking）見通しを、経済学では「期待（expectations）」と呼んでいる。期待という用語は、ある種、経済学の同業者用語（jargon）であって、必ずしも「よいことを待つ」という意味ではない。将来に向かって見通しを立てることであって、予想（foresight）や予測（prediction）と基本的に同義と考えてよい。

こうした経済主体の期待を経済学ではこれまでどのように捉えてきたのかについて簡単

に振り返っておこう。過去の研究者たちがこの複雑なテーマといかに取り組んできたのかを学んでおくことは、問題の手ごわさを知る上でも有益だ。

最初に期待がいかに形成されるかを理論化したのは、古典派経済学者たちであった。

「蜘蛛の巣サイクル (cobweb cycle)」と呼ばれるモデルである。このモデルは、例えば「供給者が来期の価格を予想するときは、今期の価格と同じ価格が来期も成立すると考える」という素朴な形をとった。このメカニズムをハッカ栽培を例にして説明しよう（河崎秋子『土に贖う』の「^{みどり}翠に^{はびこ}蔓延る」）。

清涼感のする香りや味のするハッカ（メントール）が日本で栽培され出したのは江戸後期からであるが、本格的な生産は明治に入ってから、主に北海道への移住者によって始められた。食品、医薬品などにも用いられ、1930年代の日本のハッカ生産は、世界全体のシェアの7割を占めるほど盛んであった。しかし戦後は、インド、ブラジルからの輸入品や石油を原料とする合成ハッカの登場で衰退を余儀なくされた。

ハッカ農家が前年の市場価格を前提に今期の作付けを決めても、今期に予想した価格が翌年に成立しているとは限らず、需要側に「高過ぎる」とみなすものが多ければ売れ残る。こうした状況に陥り、農家は窮地に追い込まれる。

ハッカが高価格で市場に出回っていることを農家が知り、「そんなに高く売れるなら増産だ」と判断して、ほかの作物用の農地をハッカ生産に転用する。ほかの農作物の生産は減少し、ハッカの生産量は増加する。しかし増加したハッカを市場へ供給できるのは次の時期だ。翌期に、農家が生産したハッカを売り尽したいと思っても、次の年の需要に対して供給過剰になり、価格を下げざるをえなくなる。その次の時期には、下がった価格に応じて供給する量を減少させるため、市場は需要超過になる。こうして供給超過と需要超過のサイクルが生まれ、直ちに需要と供給が一致することはない。サイクルを描きながら需給をバランスさせる価格の周りをグルグル回るといふ現象が生まれるのだ。このように予想と現実の乖離を繰り返し、最終的には需要曲線と供給曲線の交点に価格が落ち着く過程を「蜘蛛の巣サイクル理論」は記述する。この過程を需要曲線と供給曲線を使ってグラフに描くと、蜘蛛が巣を作るような形になるので、「蜘蛛の巣サイクル」との名がついた。

この調整過程の描き方には重要なポイントが二つある。一つは、こうした農家の期待(予想)形成では必ずしも最終的に需給両曲線の交点の均衡価格に収束するとは限らないということ。需要曲線の傾きが供給曲線の傾きよりも急な場合は、価格は需給両曲線の交点へと収束せずに、大幅な上下振動を繰り返しながら発散するという不安定な状態が生まれる。

さらに重要なのは、このモデルでは来期の市場価格が、今期のそれに等しいという素朴な予想がなされている点である。次の年も今年と同じ価格で市場取引ができると予想している。これを「単純だ。現実はずっと複雑だ」とコメントするだけでは評論家に過ぎない。このシンプルなモデルのどこに、どのような修正を加えていけば、よりよく現実を記述できるのかを検討するのが、「理論的に考える」ということなのだ。

（出典：猪木武徳『経済社会の学び方』中央公論新社、2021年より、一部改変）

設問1 自然科学研究一般と比較して、社会科学研究の特徴はどこにあると考えられるか、150字以内で述べなさい。

設問2 経済学において「期待」を理論化することの難しさを、文章の例を参考にして、300字以内で述べなさい。